



RISING

mini

Vol.04

一次創作、二次創作をひとまとめにした増刊誌 第四号登場!!

Creat.inc



目次

ロジカリスト(白)……………	3
2日目C 考察一……………	3
ネクストワールド 名のなき世界3……………	15
俺の同級生が魔王……………	23
第一章 後編……………	23
ここから、脱出してください。 エーテル・ラビリンズ編……………	30
ポケモン+ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編……………	40
黒板厨ゆうな☆マギカ 文化部争奪戦!(前編)……………	47
【先行公開】萌黄色の空を見る 第一話……………	59
【新連載予告】サマータイムレコード……………	63
次号予告……………	63
あとがき……………	64

ロジカリスト（白）

2日目C 考察一

ともかくあんなメールがあつた後じゃ、誰も話なんて聞いてはくれなかつた。しつちやかめつちやかになり、最終的には半ば強引に幕を閉めるかたちとなつた。

すっかり温くなつてしまつたビシソワーズスープを飲みながら、僕はふとテーブルを見渡した。

今居るのは司さんと小河内さん、それにケイリーに戸塚さんとエレンさんだ。勿論僕もここに居るけれど。

「……何を調べているんだい？」

まず、僕はケイリーに問い掛けた。

「食事中には見ない方がいいと思ふけど」

そう言つてケイリーはパソコンの画面を僕に見せてくれた。そこに映し出されていたのは、ずぶ濡れとなつていた女性の遺体だつた。そして、その遺体は何処か干からびているようにも見えた。

つまりこれは――。

「彼女の、土生月日の死体」

ケイリーは表情を変えることはなかった。解ってはいたことだけど、解っていても解らないことだってある。一パーセントの『もしかしたら……』が現実にかき起こることだつて。

「彼女の……死体」

「検死は既に済んでしまっているけれどね。犯行時刻は午前一時から午前二時……それだふと思ひ出したんだが、昨日地震が無かった？」

地震。

そんな揺れていなかったと思うけど、確かに揺れていた気がする。だからそこまで覚えていないけれど、確かに地震はあった。

「……確かにあったね。それが？」

「もしかしたらさあ、地震と殺人が関係あるのかもしれないね。ずぶ濡れだという点も少し気になる」

「地震と殺人に関係性？ まさか、有り得ない」

「ありえないことはありえないよ。もし、それが成立するならば今の技術はもっと衰退していたに違いないし。進歩もしていなかっただろうね」

「そう言つてケイリーは、パソコンを抱えて立ち上がった。」

「おや、何処へ？」

「事情聴取……とは行かないけれど。まあ、自分の部屋で若干の調査つて奴かな」

そう言つて、ケイリーはひよこひよこ階段を昇つていった。
そうか。あくまでも。

彼女は今、探偵なのだ。

そして、僕は。

それを最大限サポートせねばならない。

だって、僕は付き添いの人間だから、ね。

十一

「状況を整理しよう」

ケイリーが部屋に戻つて開口一番、そんなことを言い出した。
状況、とは。

即ち今までの全員のアリバイも含んだ形である。

「……えーと、つまりこういうことだよね」

そう言つてケイリーは名前を書き出していった。

神風沙織……午前一時現在、自室にて熟睡。

エヴァン……同様

司源道……同時刻、小河内と縣らとの会議の後食堂にて作業。

鈴生九地……同時刻、古川エレンとともに酒を嗜む。

古川エレン……同様

小河内晃之……司とのアリバイと同様

縣博乃……同様

「さて、ここで十七人居ないとまずいのだが……」

「それなら僕が調べておいたよ」

ここからは僕の出番だ。

まず、一二三さんは昨日は眠っていたらしい。自分の部屋で、ということになるから明確にアリバイは存在しない。戸塚さんも同様だ。

あと小難しそうな坊主の人——名前は大西円行おおにしえんぎようといい、やっぱりお坊さんであるらしい。彼はその時間ならお経を唱えていたとのことで、それは一二三さんが聞いていて寝る前のBGM代わりになっていたとのことだ。

産土さんは昨日は土生さんと一緒にいて……そう。ここがおかしいんだ。

「先に行ってくれ、といったことかな？」

「そうだ」僕はケイリーに先に言われてしまった言葉を、もう一度繰り返す。「先に行ってくれ、と言ったことだ。どうして、それを聞くことができるんだ？ それなら、その時間に土生さんは生きていたということになる」

「つまり、産土明がうその供述をしていると？」

「可能性はあるね」

「ふむ。……それじゃ、続きを頼むよ」

「次に、パルクール・テンシユヴェッドだ。彼女はテンシユヴェッド財閥を二代で築き上げた若き天才と言われている」

「テンシユヴェッド財閥？ ……ああ、あの一年前に一世を風靡したという新型OS『アマトラス』の開発グループか。あれはちっと使いづらんだよなあ……。一般人にならあれでいいのかもしれないけれど、私はいろいろと使うだろ？ だから使いづらかったらありやしなくてね。そうか、彼女だったのか……」

僕はパソコンにはそこまで詳しくもないから、ケイリーが言っていることがよく解らなかつた。けれども、ケイリーがそれに不満を抱いていた、ってことは容易に想像できる。

ケイリーはそういう天才みたいなものだから、パソコンは人以上に用いる。すごいときなんか一時間に五千七百文字の文章をインプットさせることが出来るらしい。とてもじゃないけれど、できない。僕なんて僅か一時間に千文字打てればいい方だ。

「……んで、エヴァン、続きは？」

「あ、ああ。ごめん。話を続けるね。それで……パルクールさんだけれど、その時間電話をかけていたらしい」

「電話？」

その一単語にケイリーは眉を潜めた。そうだろうね、僕だって同じ行動を起こしたから。

そんなケイリーの予想できた表情に少しだけほくそ笑みながら、話を続ける。

「うん、衛星電話を持ち込んでいたらしい。それで、副社長と会話をしていたらしいし、その記録が残っていたよ。時刻は午前零時二十七分から、零時五十七分まで。殺されたのは四時くらいとして、殺害は不可能ではない。だけれどね、一つ疑問があるんだ」

「きみの方から疑問を持ち込むなんて珍しいね。話してよ」

「うん。あのね、土生さんの部屋は一階にあるんだよ。そこで、この屋敷の見取り図を考えると、一階の部屋は全て食堂を通らないといけないんだ。食堂の傍のホールには階段があるから、二階にあるパルクールさんの部屋から一階にある土生さんの部屋へ行くことは不可能だよ」

僕が推論を言うと、ケイリーはうんうんと頷いた。その顔はずっとパソコンの画面にクギ付けになっているわけなんだけれど、僕の内容はそこまでツマライなものだったのだろうか？ 僕には解らない。

「一二三さんは、同じく部屋で寝ていたらいいってさっき言ったんだけど、それについての補足を。……一二三さんは参加者の中で唯一部屋を指定した人間らしいね」

「……というところ？」

「一二三さんは土生さんの部屋の位置を見て、変更を求めたらしい。土生さんの部屋の隣にしてくれ、ってね」

「それでよく、その要望が通ったね？」

「そこが僕にも解らないけれどね、なんでも縣さんはそのまま許可を取ったと聞いているよ」

ふむふむ、とケイリーは呟いて。パソコンに何かを打ち込む。もしかして、情報を整理しているのだろうか？

「……それで、まだあるんでしょう？」

「ああ。わかったよ。とりあえず言っていくな」

ひとまず、全員のプロフィール及びその当時のアリバイについて全てケイリーに話した。

縣紀之は経営コンサルタントとして様々な会社との契約をしているらしい。縣といえど、給仕である縣さんと同じ名字だが特に関係はないらしい。そう言うケイリーは見るからに落ち込んでいたけれどね。残念だったね。

遠野善央は大西さんの付き添いである。その日は大西さんとともにお経を読んでいた

らしいとのことなので、これも可能性は低い。

田町千穂は古川さんの付き添いである。古くから古川さんの友達らしく、そのため今回の付き添いと相成ったらしい。土生さんの死亡推定時刻では古川さんとは別行動をとっていたため、どこに行っていたのか不明だったし、今現在に至っても行方を晦ましている。古川さん曰く、部屋で寝ているというのだが、その真意は定かではない。

「……と、実はここまでなんだ」

唐突に終わりを告げると、ケイリーはこちらに振り向いた。やっと、向いてくれたよ。

「どういうことなんだい、私はちゃんと調べてくれて」

「そうだけれど、あんなことがあったあとだぞ。普通なら話を聞かせてくれやしない。聞かせてくれるだけでも有難いと思ってくれよ」

「そうか、そいつは仕方ない。それで？ その残り人数は三人だけれど、『主役』側は皆聴き終わっている。で、いいんだよね？」

「そうだね、そうなる」

ケイリーは小さく微笑んだ。

まったく……気持ちにはわかるけど、どうしようもない。

「……一先ず、考えをまとめようか」

そう言ってケイリーは自らのパソコンに僕を呼び寄せた。ここで、ようやくケイリーのパソコンの出番がやってきたというわけか。

「まずは、これを見てくれ」

そう言つてケイリーはパソコンを僕に見せた。画面には今までの相関図が描かれていた。今のあいだになんて仕事の早さだろう。

「……それで、これから考えるに、まだ情報が足りなすぎる事が解つた」

「だろうね。だつて、あのことが起きたばかりだ。そう簡単に話すこともないだろう。なにしろ、警戒もされているだろうし」

僕は『凡人』だからね、というのは付け足さないでおく。

案外、ケイリーはそういうのを気にしてしまふ。僕は凡人なんかじゃない、と言つてくれる時がある。嬉しいけれど、とてもじゃないけど、ケイリーたちには適わないし、二度と適うこともないのだと思う。

ケイリーはさつきからパソコンに夢中になっている。画面を見ると、何か調べている様子だった。どうせ、今回の事件に関することなのだろうが、それでも、僕にはよく解らない。探偵のケイリーに任せることにしよう。

しばらくして、ケイリーはパソコンの画面から離れて息をついた。どうやら、ひと段落ついたらしい。

「できたのかい？」

訊ねると、「まあまあ」と返つた。どうやら、芳しくないらしい。

「……そうか。出来れば、少しは役立つのだろうけれど」

「そうだね」

そう言つてケイリーは先程縣さんに作つてもらつた特製水筒を開ける。確認はしている。中身は麦茶だ。

「ああ、美味しい」

一口飲んで、思わずケイリーは口に出す。けれど、そんな変わらないと思うのだけれどなあ。

「ケイリー、美味しい?」

「ああ。麦茶つてのは本当に沁みるものだと思うよ。特にこんなに暑い日だと。水分補給はきちんに行わねばね」

この部屋はパソコンを使うのもあつて、冷房が利いているというのは突つ込まなくてもいいのだろう。

ともかく、こんなことをしている場合じゃないのは、僕にだつて理解できた。

第一の殺人が起きてしまったのだ。

犯人を、探さねばならない。

かくいう僕も凡人ではあるのだが、ともかくそれを悪いと思つたことはない。かくして、僕は凡人たる所以を知っているからこそ、凡人であるのかもしれない。恐らく、彼女や、天才と呼ばれる人間は天才たる所以を知っているからこそ、天才であるということにも、僕は考えられるのだ。

つまりは、僕が僕であって、ケイリーがケイリーである所以は、それ自身の存在でしか解り得なかったし、それは自明であることも僕は知っている。

さりとて、僕が僕らしい生き方を送ってしまうのもどうかと思うし、どうかと知れる。生きてる意味はほんとうにこれであっているのか、正しいのかも知らないし、生きてるのは、本当にほんとうなのかも知りはしない。

果たして、僕は僕なのか？

思うことは——ないだろうか。僕は常に思ってしまったし、思うこともある。分かったくもないし、けれども、いつかは対面せねばならない議題であることにはかわりないのだ。

「……ひとまず、ではあるが、完成したってのもあるし。次に行動を起こそう。ただし、私が探偵だとばれてしまえば元も子もないがね」

「それはそうだけれど……どういふ行動を起こすつもりだい、ケイリー？」

「間違っではないけれど、間違いたくもない行為さ。間違ってしまったら、私はこの世から消えてしまうことには間違いないだろうし、間違っていること自体が間違っている可能性だって充分に吟味出来る」

「何を言っているかわからないし、そもそも目的を言っていないよね」

「ああ、そうだったね。とりあえず、結論だけを述べるのも、なんといいかつまらないよね、って思ってたさ」

「別につまらなくはないだろう。さっさと話せばいいんじゃないか」

「果たしてどうだろうね」

ケイリーが考えていることは、やっぱり解らないし、いつになっても解ることはないのだろう。解るのだとすれば、それはもともと『天才』といえる立場の人間であろうし、僕みたいな凡人には解ることもない。そもそも、凡人と天才が分かれているのは、こういう自意識の高さも考慮されているのではないか、と思うときすらある。

「……それで、だね」

「うん」

おっと、忘れていた。

それで、ケイリーの結論とは、なんなのだろう。

「——それは」

ケイリーがそれを言う、ちょうど、その時だった。

「キヤ——!!」

階下から、悲鳴が聞こえた。あれはきつと……縣さんの声に違いない!

「行くよ、ケイリー」

「解った!」

こうして、僕らは大急ぎで部屋の外に出た。

ネクストワールド 名のなき世界3

第一章 第二話

イクスたちのいる世界には大きな壁がある。イクスたち人間はそれを『龍の境界』と呼んでおり、なぜその名前なのかといえば、それは彼らにも解ることではない。古い本を見ても曖昧なことしか書かれていないが、しかしこれだけは解る。

それは、その向こうに『龍』が住んでいるということだ。しかし、その壁は余りにも高く、いくらその龍でも登ることなどできないだろうし、そもそもそれすらも寓話に過ぎず、実際に見たことのない人の方が殆どなのだから、信じない方が妥当だろう。

そして、それを、提示したのがあの『安定化装置』だというのだから、やはりイクスは不信感を拭えない。

そもそも、どうして何千年もこの世界を守っていた存在が、つい数年前になって一般に知られているようになったのか？ という疑問が生まれてくる。

それはやはり『不都合があったから、意図的に公開されたのではないか』という一つの推論が浮かぶ。

そもそも、データが完璧である保障もない。保障もないのに、どうしてそれを鵜呑みにするのか、彼には信じられない。

「やっぱり……解らない」

イクスはフォッコとともにアサメ村の畦道を歩いている。

「フォッコ、なあ、お前はどう思う？」

イクスの質問にフォッコは首をかしげるだけであった。

「だよなあ……。俺がわからないのに、フォッコが解る訳はないか……」

イクスの言葉にフォッコはイクスの足に鼻を擦りつける。

「擦ったいぜ。フォッコ」

そう言つて、ゆつくりと畦道を歩いて、彼は家へ帰っていく。

十一

世界の中心に位置する、安定化装置を取り囲むようにゲヘナの塔はそり立っていた。
「報告を、していただこうか」

ゲヘナの塔七十階にある『戴冠の間』で、ひとりの少年が独りごちっていた。
壁から、声が現れる。

『——「希望の門」が完全に封印され、早幾年と経過した。しかしながら、真の平和は未だ訪れてはいない。どうすればいいのだろうか、と訊ねたく思つてだな』

「それで、僕に——か。面倒くさいなあ、本当に。まさか、僕が再び呼ばれるだなんて、

僕自身にだって理解し得なかったよ。君はそれを予想していたかい？」

『いいえ、恐らくあなたと同じ立場ならば、私であっても驚いていたことでしょう。まさか、これほどにまでも早く、あなたの力をお借りすることになるとは……』

「だったらす」

少年は嘯く。

「……まずは芽を摘めばいい話なんだよね。なあ、そうだろう」

同意を求めるように、少年は壁に手を当てる。

壁は答える。

『そうだ。しかし、そう簡単にもいかないだろう。さりとて、この時代。いくら人間とはいえ、忘れえぬものとなっているのだ。それくらいは、君にだって知り得ている情報だとは思うのだが』

「ああ。確かに、そうだ。けれども、だ。人々は勇者という存在を最早信じてはいないそれに、世界というものは終焉することがないと勝手に信じて込んでいる人間すらいる。嘆かわしいことだ。少しは、考えてみれば解る話だというに」

『ヒトというのは、悪い方向にはあまり考えようとはしまいいよ。進んで考えるなどというのは、しないものだ』

「そういうものかな」

『ああ、そうだ』

少年は小さく微笑む。

それは、誰に向けての微笑みなのかは——解らない。

「……ともかく、僕を呼んだのであれば好き勝手やらせてもらうよ。まったく、あんたも壁を媒体にするんじゃないやなくて、さっさと出てくればいいのに。どうして出てこないんだか。恥ずかしがり屋なわけでもないだろう？」

『それでもないけど、面倒なだけだ』

そうか、と少年が呟くと、壁から気配が消えた。

少年はそれを見計らうように、そこから立ち去っていった。

第一章 第三話

その頃。

遠く離れた、ある国でのこと。

かつて『強者』ばかりを集め、トーナメントというかたちで最強を決めるということをしていた、とある国のことだ。

「……お逃げください、陛下。この国は既にもう……!」

栄華を誇った王城は至るところに火が放たれ、最早その姿を為していない。

そして、その城に残っているのも、王と僅かばかりの部下だけとなっていた。

「……市民は無事に逃げることはできたのか?」

「はい。特に問題もなく、混乱もなく、他国へ逃げる事が出来ました。同盟国であるアルデルトンへはスムーズに行くこともできました。アルデルトンの魔術師たちが居たから出来ることでしょう」

「そうか……。ならば、もう思い残すことは、ない」

王はそう言うのと、小さく息を吐いた。

「……! 陛下、なりません! 陛下はまだ頑張ってもらわねば!」

「この老いばれにできることなど、とうに消えているよ。それに、もう時代も変わりつつあるのは自明だ。だったら、今消えるのがいい時期だとは思わないかね」

「そう……なのでしょうか」

「ああ。そうだ。そして、私から君たちへ、最後の命令を下す」

——生きろ。

その言葉に、部下全員は息を飲んだ。

「どんなにみずぼらしくてもいい。這い蹲ってもいい。ただ、生きろ。どんなにみみっちくてもいい。どんなに最低な生き方してもいい。ただ、生きるんだ。いいか。生きる。生きてくれれば、それでいい。いいか——」

そして、その言葉は。

ケサムドー城にいた、人間全員が永久に忘れることがなかった。

「——私とともに死ぬなんて、ことは許さない」

十一

そして、そのニュース——『ケサムドー陥落』がイクスの耳に入ったのはそれから数日経ったある日のことだった。

「ケサムドーが陥落した……って。勇者の居た場所じゃないのか!？」

イクスはいつもの秘密基地に来ていた。いつもイクスはここで遊ぶ。幼馴染のサナとトロバといつもここでポケモンバトルをする。

「僕も風の噂で聞いたんだけどね。なんでも、勇者は死んでしまったらしいよ」

「そんなわけがあるか！ 勇者は生きているんだ。こんな、世界が危なくなる時にやってくるに決まっている！」

「けど、来ないよ、イクス」

トロバの言葉はイクスに突き刺さる。

そう、勇者は来ない。

勇者は——死んだ。

その事実を、受け止められずにいた。

だがしかし。

けれども。

彼は諦めたくなかった。そんなのは嘘だと信じたかった。いや、信じてみたかった。正義は必ず勝つのだということの、典型的な例こそが『勇者』というパッケージである。だからこそ、人々は勇者という存在にすがり、生きるのだ。

だが、今はどうだろうか？

今は、勇者と呼ばれる存在を、誰も信じていない。つまりは、勇者にすがる者等いなということだ。

「勇者という存在がなくなった、とトロバは思っている？」

唐突に。

本当に、唐突に、イクスは尋ねる。

尋くのも阿呆らしい質問になるのかもしれない、とイクスは自嘲する。
しかし。

「……信じているよ。きっと、勇者は、いる」

トロバはそうはつきりと答えた。

そして、それを見てサナも、笑ってうんうんと頷く。

「勇者という存在は本当にいると思うよ。それに、居なくちゃ、この世界はとうに滅んでいたかもしれない。そうだろ？」

「だな。そうだな」

イクスは自らにも再確認をとり、大きく頷いた。

俺の同級生が魔王

第一章 後編

「なんじゃそりゃ。それってただの厨二病じゃん」

大田は笑いながら答える。

ずっと今までその友人、大田にはなしていた。

「いや、これってすべて真実なんだよ」

「うそつけ。そんなわけあるか」

大田に一蹴されてしまった。

「……ところで、今何時だ？」

「やべっ!!! もう8時半じゃねえか! 急いで走るぞっ!」

俺らがいざ走ろうとしたのもむなしく、その坂の上でチャイムが鳴り響いた。

十一

およそ十五分遅れで学校に到着し、二人そろってお説教をくらった俺と大田は放課後トイレ掃除の刑を言い渡された。

「ちっ。なんで俺がこんな目にあわなきゃいけないんだ……」

「まあ。仕方ないじゃないか。トイレ掃除なんかすぐ終わっちゃうよ」
「なにやってる」

俺と大田の会話を切り離れたのは、それだった。

今まではなしていた自称・魔王。

「なにしてるの。っーさん」

「あだ名で呼ぶなよ！ そのあだ名を呼んでいいのは親と数少ない親友だけだー！」

「え？ そんなかに俺は入ってる？」

はいはい入っておりますよ、と適当に返事をしておく。

「んで、っーさん。こいつが例の……」

大田が言葉を濁し、俺の方に目を向ける。

「ああ。自称魔王だよ」

「自称ではない。他称でもある」

「いったいどこの誰がこの見た目百％日本人のこいつを「魔王」と呼ぶんだ？ とか思
つていたのだが。」

「あんた、この前証拠見せろって言ってたわよね」

「ああ」

「その証拠、見せてあげるわ」

「は？」

その刹那、彼女のまわりに風が吹いた。

それを見ていた俺と、大田はしばらく何も話せなかった。だって、考えてみるよ？ 今までの日常が悉くそれで崩されたんだぜ？ もしくはその女の周りに旋風が吹いた、って考えるのか？ いやそんなやつもいるだろう。しかし俺は言つてやるよ。「そんな一言で片付けられることじゃない」ってね。

そんな俺と大田の驚く表情をみて、そいつは笑つてた。まるで逃げ惑う鹿をみて笑うチーターのように。

「どういうことだ。こりゃ……」

「信じられない、とでも言いたいのか？」

彼女は俺が口にする前にその言葉をいい放った。

せめて、俺に言わせるよ。とか思っていたけど。すぐにそいつはそれを言わせるのをやめさせるような発言をした。

「どう？ 信じた？ これで私の部下になるわね？」

「だから、ならねえ。いい加減にしろ」

「……おい。まさかおまえずっとそれ言われていたのか？」

ずっとこのけもの、というか俺と彼女の話に飲み込まれて空気と化していた大田が口を開いた。

「ああ。そうだよ。分かるか。俺の気持ち」

「ああ。まず男子トイレに普通に入るところからして普通の人間じゃねえよ」

そこかよ。おまえ今までその会話を聞いてて違和感はそのだけかよ。もうおまえも観点というか目の付けどころがおかしすぎるよ。とかそんなことを思っていたのだが。

そうして大田は笑って言った。

「あんた、だれだ？」

「魔王よ。何度言ったらわかるのかしら？」

まだ大田には一回しか言っていないじゃないか。とか俺は思っていたのだが。

「ともかく私の部下になりなさい。さもなくば」

「さもなくば？」

「後ろにいる魔物に突かれて死ぬわよ？」

刹那、二人を槍が襲った。が、ふたりは自称魔王の助言のおかげで助かることができた。

「あれはなんだよ」

俺は走りながら、魔王に話しかける。

「あれはやつらが『聖獣』と呼ぶ存在。魔の世界にも強硬派と話し合いで解決させようとするものもいるってこと。わたしは後者ね」

そのどこが、とつつこみたかったが、そんな気力はなかった。

さらに、聖獣とやらが追撃を加え、俺と魔王の間に細長く腕を通したからだ。

「うわっ」

俺は思わず驚き、立ち止まりそうになったが——なお、走った。だって、考えてみる？ここで仮に立ち止まったらそこにいるキメラよろしく、ライオンより凶暴ななにかに身を委ねることになる。それが何を意味しているか、わかっているだろう？

俺は今まで受けたことのないような、恐怖に襲われた。それはまるで、崖すれすれで歩いているような気分だ。

『死』。

その時俺はそんなことを考えていた。もう終わりなんじゃないか、ってね。でもな、やつぱり。

『非現実』にいるんだなあ。と自覚することになってしまったよ。

何があったって？ 答えは簡単さ。

彼女が、そのモンスターに向かって白い咆哮を放ったのさ。それを受けてモンスターは綺麗サツパリ消え去ったよ。そして、彼女は満足そうな笑みを浮かべて、こういった。「もう、ここはあなたの知ってる世界じゃないのよ」ってね。

十一

そんなことから1日がたって、俺と大田はまた普通に馬鹿騒ぎをしていた。

ふと、大田が、

「まったく昨日のあれはなんだったんだ？ 動物とも人間とも取れないわけのわからないやつが来たと思ったらクラスメートが白い咆哮を放って撃退した？ まったくもってわけがわからん」

鉛筆をくるくると回しながら、言った。

「それは俺にだってよくわからん。でも見たことある世界で起きたことだ。ほんとのことなのかもしれないぜ？」

「おまえ案外冷静だな。まるで昔、こんなことがあったような感じがしているなあ？」
太田はニヤニヤしながら言った。

「そんなわけねーだろ。常識的に考えて」

「ま。そうだな。でもね」

大田は言葉を切って、

「もうおれらは非現実の世界にいるのかもしれないんだぜ？」

「そうだな」

そう言っただけで俺は制服のズボンのポケットに入っているメントスを一個取り出し、口の中に放り込んだ。

「あつ。俺もくれよっ！」

「やらねーよ。お前なんかにやるメントスは毛頭ない」

まあ、少しは。

この非現実を、楽しんでみようじゃないか、と思っても見るのだった。

第一章 終わり

ここから、脱出してください。 エーテル・ラビリンス編

第1層

「あなたのせいで値引き交渉失敗したじゃない！ どうしてくれんの！」

結局コイツに町外れの丘にまで引つ張られてしまった。すげえうぜえ。どうしてくれよう。

「……けつこう強気のようね」

いや、おれはめんどくさいから何も言わないだけだが……しやーない。うん、もうめんどくさい。早くこの茶番がおわってくれば、俺はどうだっていい。

「あんた気に入った。一緒に旅してやってもいいよ」

——は？ 何言ってるんだ？ 何照れてるんだ。まさか……え？ え、そんなわけない。うん、俺からみて最悪な性格なんだぜ。値引き交渉（しかもたかだか10G程度）する女なんて……なあ。

と、ふと俺は丘の下を眺めると瓦礫に隠れて大地が親指を下に突き出していた。さて！ これは愛の告白なんかじゃねーぞ！ だって俺返事してねえもん！

「……べ、別にあんたのために付いていこうと思うんじゃないんだからねっ？」

うわー典型的ツンデレだわー、俺の苦手なタイプ。油だ、油。俺が水ならあんたは油。

それくらい嫌い。

「……わかった、で名前はなんと？」

とりあえず丁寧に。一応女性だからな。それくらいマナーはちゃんとしているさ。

「あたしの名前は東野英里紗。エリサって呼ばれているわ」

そうか、まさか自分からあだ名を打ち出すとは。とエリサの目を見ないで思った。まあ、とりあえず握手はしておこう。ばちは当たるまい。

「……えっ？」

困った表情を見せたが、すぐに手をだした。なにこのゲーム的な展開。まさか俺これ終わったら死ぬんじゃないな。というかすぐく照れている。リア充ライフの始まりだろうか。大地の方を見るとハンカチ噛み締めて泣いていた。まず鼻をかめ、鼻を。

……まあ、これで俺はこの脱出作戦の決行中、飽きることはないだろう。俺はそんなことを思ったのだった。

さて、ところでここまで戻ってきた。どこかといえれば第一層の宿屋だ。第一層は優しい。なんと無料だ。さすがだ、無料はいい。ただし、部屋が埋まりかけということもあるが、実際は皆ここを脱出しようとしている。

「つて思うでしょ？ ……外見てご覧よ」

エリサの言葉を聞いて、俺は外を見てみた。すると、どうしてだろう。脱出していこうとする人間は、一割にも満たない。残りの九割はここで（ここに理由もなく閉じ込められたことも忘れているかのよう）に過こしていた。

「……まあ、当たり前かもしれないよね。外は都会の喧騒で、理不尽なことにストレスを感じて嫌になる日々。だけどここじや、限られた人間と共同生活。生活は新石器時代に逆戻り。ストレスなんて感じないでしょうね。……どっちを選ぶかは明白だと思うけど？」

「……まさかあの『マスター』とやらはこれを加味して……」

「どーだろうね？ もしかしたらそいつは世界の科学技術を凌駕したなにかを持っているのかもしれないし」

「……なんで、解るんだ？」

「あたしはね、考えるより行動する派なの。なんとなくそれは解る。」

「それで、一層に侵入してみた。二層にあわよくば進めれば……って感じで」

「……結果は？」

「ヘンゼルとグレーテルってあるじゃん？」

おい、質問に見合った答えをしてくれ。それってどういう意味だ。どうして、童話が

今関係するんだ？

「パンくずを落とすじゃない、彼女たちって。迷わないために、ね」

「……ああ、確かそんな話だったな」

「私もそれに肖って、パンくずを落とすとしていったわけよ。いやー、結構大変だったわよ。どれくらいつんだことやら」

「わかった、結果だけ言ってくれないか」

「せつかちね、ま、いいけど。……どういふことかと言うと」

「あの迷宮、生きているのよ」

何を言っているんだ、こいつは。いきなり、『迷宮が生きている』だって？ そんなわけないだろ。

「ほんとうよ。まるで疑ってないようだけど。あそこは目印を付けても無駄。生きてるように移動する。仕組みを変えていくの」

嘘だろ、ふざけるな。そんな迷宮が、存在するだと？ 現実の科学技術じゃ作れないじゃないか！

「それだから、マスターとやらはこの世界の科学技術を超越してるんじゃないか、って言いたいだよ。……ま、脱出が出来ればそれも少しくらい明かされそうな気もするでし

よ？」

「なんでだ？」

「だって、最初からこんなのなら、次はもつとすごいはずでしょう？ この迷宮は恐らく『クリアできないように』設定してあるなにかよ。だけど……それを私たちがクリアしてしまつたとしたら？」

「……マスターとやらは目の色を変えるだろうな。人間に対して」

「そう、そしてそいつは必ず姿を現すはずよ。そして……そこを狙う」

「狙う、つて……まさか倒す気でもあるのか」

「当たり前じゃん」

質問した俺が馬鹿だった。

「——まあ、てなわけできつさと一層クリアしちやおうよ。この感じなら別の層にも人があるんじゃない？ なんせあんたがきたのつて『五番目』だからさ」

……は？ 五番目、つてことは。つまり、一層目とかあるのか？

「そうよ。ちなみに私は二番目。適当にクリアをしようと思つても、一層の宝探しもできずにこのへんでぐずぐず腐つていきそうだったモンさ」

「宝探し？」

「そう、一番目のエリートプレイヤー、名前は確か『エイト』つていうらしいんだけど。そいつが、一層でたからを見つけてきたのよ。それも、高級なものらしくて、それで一

部のプレイヤーは躍起になったわ。しかも一日寝て行ったら復活してるのよ？ どのRPGの話よ」

いや、それってどこのRPGでもあまり見ない仕組みだと思うぞ。……にしても宝探しか。ふむ、ひまつぶしにはなりそうだな。

「……ちなみに第一層の宝はコンパスらしいわ。なんでも、それが出口を必ず指し示すんだとか。それでも、そこまで行くのに死人は結構出てるとも出てないとも……」

「曖昧だなオイ」

「まあそれでも行く人は多いヨ？ だってコンパスは必ず出口を指し示す。迷宮攻略には完璧！」

「たしかにな。……で、どうする？」

おれはひとまず空気になりかけている大地（もしかしたら自らの立場を自覚してしまっているのか、いつの間にか入り込んだ猫とじゃれ合っていた）に話を投げてみた。

「……なにが？」

まあ、案の定聞いてなかったというわけで。

「宝だよ。宝。しかも、ここを脱出するために、必要なんだと。……どうする？」

「どうするも何も、そうなら行かないとまずくないか？」

「だよな」

「それじゃ満場一致で宝探しに向かうということだ」

「おー」

なんだこのやる気のない感じ。ほんとうに宝が見つかるんだろうな？ 俺はそんなことを思ったがすげえやる気のエリサの顔を見て、そうとは言えなくなつた。

エーテル・ラビリンスの実質の入口はクラウド・ビギニングの中央広場にある。とても小さな祠のようなものだ。そこに俺達はそれなりの装備と、それなりの食料を持ってやつてきた。

「さて、ついに行くわよ！ 目指すは第二層！」

なんか展開が遅い気がするのは気のせいだろうか。朝飯に食つたカツサンドの味がやけにうまかつたことを思い出しつつ俺は携帯電話を眺めてみた。当たり前だが、圏外である。だけど、電気と充電器があつた（もしかしたら、この状況を想定していた？）ので、充電して利用している。見ているのは——写真だ。家族の写真だ。

……いつ戻れるのだろう。俺はそう思って項垂れた。だが、エリサと大地はそこまで俺のことを心配してくれていない。彼ららしいのでもあるが、俺はそれの方が気が楽だ。相手にも、自分にも、迷惑をかけないで済む。

「……どうした、浮かない顔をして」

エリサの声で俺はふと現実へと回帰した。そうだ、『いつ戻れるか』解らない世界のことなんて、今は考えてはいけないのだ。俺は、目の前のこの世界『エーテル・ラビリンス』について、考えなくてはならない。そうでなくては、俺は生きていけないのだから。

「向かうぞ」

入口はエレベーターというよりは瞬間移動装置（テレポーター）に近い。テレポーターとは簡単なことで座標Aから座標Bまで世界を歪めて一致させる。メビウスの輪に近い感じだろうか。

つまりはそれを利用して、エーテル・ラビリンスのラビリンスエリア（命名：俺）へと入っていく。シティーエリアとはこれで行き交いできるらしく、つまりはテレポーターがあれば、帰ることが可能である。

「……ああ、行こう」

そして——俺達はラビリンスエリアへと向かうテレポーターに乗り込んだ。

十一

簡単に言おう。

メビウスの輪は、俺たちに味方しなかった。

「……なんじゃこりや……」

そこに広がっていたのは、真っ白な空間だった。

だが、それ以外にもあった。

何かって？

「通路が……四つ。しかもこのどれも全てが移動する……だと?」

「どうやら、この四つの通路全てがテレポーターの役目を担ってるっぽいね。……だから、ポート番号を逐次に変更して、行なっている。それなら理由も付く」

「なんでお前科学的な知識がそう簡単にはんばん出てくるんだ? ……まさか現実世界では結構な」

「いやいや、俺はただのしがない高校生だったよ。ただ、パソコンが好きだから、いろいろとやってただけさ」

とりあえずだな。

「……これをどうする?」

——ひとまずの俺たちの目的。

この迷宮、どう『攻略』する?

「エーテル・ラビリンス、クリアできそうなのはどれくらいの人数だ？」
どこかの空間で、ひとりの男が呟いた。

「——今のところ、六千二百人のうち、三百七十人が第四層“ギルド・セキュア”に到達、彼らはそこへ拠点を構え以後の探索を行っています。後進として百四十人余りがその下を探索しています」

「……ということは残りの五千八百人余りが『クラウド・ビギニング』に定住した、と？」
「そういうことになります」

「……『エーテル・ラビリンス』もう何十回やってクリア出来た人間は居なかった。……今度こそ出るのかね」

「私も、それにかんじては楽しみにしております」

執事と思われる男は、その男にそう告げて、部屋を出ていった。

「……長い夢を、果たしてくれるのは？」

そして、男は深い眠りについた。

ポケモン十ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編

第五回

「どうするんだ。これから？」

カズヒデたちはゲンムの城へたどり着いた。しかし、勿論のことカズヒデのような得体の知れないブシヨウを入れるとはおもえない。

「なにものだ、貴様」

当たり前のようにだが、城門にいる衛兵に訊かれてしまった。

「いや、ケンシンに会いたいんだけど」

せめて『様』をつけるよ、とハンベエは薄ら笑いを浮かべる。

そして、衛兵は肩を震わせる。当たり前だ。見ず知らずのブシヨウに、自らが仕えるブシヨウを呼び捨てにされたのだから、怒るのも最早仕方ないようにも思える。

「……貴様、ケンシン様を愚弄しおったな!!」

「待て」

衛兵とあわや戦闘——となるところだった、ちょうどその時だった。

城門が開き、そこからひとりの男が現れたのだった。そして、ハンベエはその姿を見て、愕然とした。

この男こそが、ケンシンだった。

ケンシンという存在は雄々しくたっており、カズヒデを見つめていた。

「……カズヒデ、だったか。何を目的としている」

「それは、俺が何をしたいか、ということか？ だったら、簡単だ」

カズヒデは拳を握る。

「——ランセ地方を統一すること、だ」

それは、ランセに居るブショールならば、誰もが願うこと。

しかし、それは当たり前過ぎて、または恐ろしすぎて、言うのも憚られることだ。

カズヒデはそれを、息もつかずに言つてのけた。それを聞いて、ケンシンは小さく微笑んだ。

「……解つた。客人を招け。丁重に、だぞ」

そう言つてケンシンは城門を潜つていった。それを見て、衛兵は敬礼をもつて見送つた。

ゲムムの城の客間にカズヒデたちが通されたのは、それから数分も経つていなかった。「……いや、こちらから招いて済まなかった」

ケンシンはそう小さく頷き、目の前にある茶を啜った。それに倣い、カズヒデたちも同様に行く。

それを見計らって、ケンシンは言った。

「さて、カズヒデとやら。少し訊ねてみようか。よくも私に対して、『ランセを統一する』などと言えたな。まずは、その根拠を話してもらおうか」

「簡単なことだ。『やりたいからやる』、それだけだ」

「やりたいからやる、ね……」

ケンシンはカズヒデの言った言葉をリフレインする。

けれど、それでカズヒデのことが解るとも思っではいなかった。

今、目の前にいるのは呆気者だ。それも、ただでは転ばない、呆気者だ。ちゃらんぽらんに見られるが、人の観察力は高いハンベエが付いている時点で、彼は解る。彼の危険性は、ケンシンにとつてどれくらいなのか——それは自明だった。

「……ならば、どうする。私をイクサで倒すか？」

ケンシンはここでひとつの質問をかけた。これは、カズヒデの真意を知るには全くもって、ベーシックな問題であり、質問であり、愚問であった。

「……いいや。違う。仲間にする」

「は？」

カズヒデの回答に、ケンシンは思わず呆気にとられてしまった。

「私を目の前にして、『仲間にする』とはいい度胸だな」

「……そこまでしなくちゃ、ランセは一つに出来ないからな」

ははは、とケンシンは笑う。

しかし、ケンシンはその言葉にどうするかを考えていた。

従うか、否か。

正直なところ、カズヒデは敵にしているのは危険な存在であると、ケンシンは考えていた。ならば、力が弱い今のうちにイクサで叩き潰すか？ いや、それをしては、恐らく負けてしまう可能性すらある。それほどに、カズヒデの力は未知数ということだ。

カズヒデを倒すか、否か。

それは、今のケンシンにははつきりと決着が着かなかった。

そして、ゆっくりと息を吐いて、告げる。

「……少し、考えさせてもらおう。私も一国の主。そう簡単には決められないものがある。……」

「わかった」

その言葉に、カズヒデはゆっくりと頷いた。

第六回

話が終わり、一先ずカズヒデたちは城下町のある宿屋へ来ていた。

宿屋の部屋は二つ確保し、それぞれ男性陣、女性陣と分かれることとなった。そのひとつ、男性陣の部屋での話である。

「……よく、ケンシンの目の前であんなの言えたね」

「あの時はちよつと焦ったかな。大丈夫かなあ、とか思つてはいたけど」

「あそこまでは考えていなかった、つて話？」

「まあ、そうかな」

そうだと、と笑いながらハンベエはモココの頭を撫でる。

「さてと……それじゃ、寝ることにしようか。もう夜も遅いことだし」

「そうか」

ふたりはその言葉で布団へ入った――

――ちよつどその時だった。

ガガン!!

屋根が何かの力によつて貫かれた。

「……な、なんだ?！」

カズヒデとハンベエはその音が起きた方向を見た。そこに居たのは、ひとりのシノビだった。シノビのそばにはアーボが一匹いた。おそらくは、シノビの持ちポケモンなのだろう。

「貴様……!」

「死んでもらうよ……。君はこの世界には必要ない存在だ」

シノビはそう言うと、カズヒデたちに向けて指を指す。

それを合図として、アーボが毒液を吐き出した。そして、それがハンベエに命中する。

「ぐはっ……!」

それを見て、カズヒデはシノビに向けて叫ぶ。

「おい……。ポケモンはポケモン以外に攻撃してはいけないだろ?!」

「いけない? 果たして、それは誰が決めたものなんだ。それは平和主義者が決めた勝手なルールだろ? イクサでも、こういう戦いでも、ポケモンが人を攻撃しちゃいけないなんて単純なルールが通用するとも思っていたのなら、まだあんたは子供だということだ。そして——さっさと、死ね」

シノビはさらにもう一度手を上げる。

「プクリン、ゴー!」

「な……。!?」

シノビがその声の発生源へ振り向いた瞬間、どこからか現れたプクリンがアーボに体当たりした。

そして、そこにはオイチたちがいた。

「くっ……まさか、ここまで早く見つかるとは」

「そりゃー、そこまで大きく騒いでいちや、聞こえるもんでしょ」

そう言っただけで呆れたような表情なのは、シノだった。

「全く、困ったもんだよ」

オイチはプクリンに『いやしのひかり』を行使した。すると、ハンベエの傷がみるみるうちに回復していった。

「……いや、済まない。少し、気を抜いてしまったよ」

ハンベエが小さく照れ隠しで笑った。

そして、改めて捕まえたシノビの方を見る。

「……どうして、こんなことをしたのか。話してもらおうよ」

黒板厨ゆうな☆マギカ 文化部争奪戦！ (前編)

プロローグ

少し空が涼しくなってきた。そろそろ子供が長袖を着てそれでも子供は風の子って言葉が似合うくらいに遊びに行くんだろなあ、と思っていた今日このごろ。私は中学校へと向かう坂道を登っていた。

坂道はゆるやかに上り坂であり、海の方を臨むと風車がたために回転している。それを見ていると何らかの催眠にかかりそう。私はふと前に目をやった。

「やつほ。優菜」

そんな声で背中を叩いて声をかけたのは蓮野陽香だった。鮮やかな紫の髪を肩にかかるとまで伸ばした少女だった。陽香はいつもなんかいい匂いの香水をつけていた。それはとてもいい匂い。しかしか形容できなくて、それは私の想像力の乏しさも意味しているのだ。けど、それは昔からなので仕方ない。国語の成績だ。つまりまずまずなのだ。

「ところでさー。今日ってあれよね？」

陽香は一息置いて言った。

「やしーろがどの部活に入るか、決める日」

ああ、と私は適当に相槌をついておいて。

「でも、本人が決めることだからどれになるかもわからないし、もしかしたら部活に入らないかもよ?」

「そうね」

でも、と陽香は続けて、「それを一番気になってるのは、あなたじゃないの?」と、言って二人で並んで笑いながら歩きだした。

十一

あのあとは他愛もない会話ばかりが続いていた気がする。私の学校は土足だからそのまま入って全面ガラス張りでなんだかとっても仕切られている感じがしない教室に入っ
て、まず私は自分の席に座った。

「ふう……。今日の一時間目は理科かあ……」

私が無意識につぶやいていると、

「そうよー? 今日から2分野だからね? 生物に入るよ? 教科書は持ってきた?」

黒板消しを持ちながら、寺島鈴菜が近づいてきた。黄色いリボンをつけた少女である。とある部位が普通の中学二年生より発育がいいように見えて私と比べていったいどうしたらああいうふうに発達するのか今度個人レクチャーを受けてみたい気がするけど……。

「あら？ どうしたの。もしかして教科書忘れた？」

鈴菜はあどけない表情で私に話しかけた。ごめんなさいいわすれました。気づきませんでした。まだ1分野だと思つてました……、とありのままの言い訳を言うつと。

「そう……。もういいわよ。あとで見せてあげるから」

鈴菜はうんざりしたように、でもそれをなんだかんだで楽しんでいるようにも見えただけ、言った。

A-1

「清白優菜、ちよつと」

午後の授業が終わつて、私は鈴菜から教えてもらった紙パックのレモンティーにストローを挿し、飲もうとしていた時だった。学生服のズボンにカーディガン——よくある学生の格好をした『彼』がそこに立っていた。

「どうしたの？」

「文化部とかの説明を受けようかな、と思つて。君ならわかるだろう？」

彼はそう言つて笑つた。彼と話すのはなんだかんだで数え切れないが、なんだかんだでもうなれちゃつたものでもある。

「……いいよ。ちよつと待つてね。帰る用意しちゃうから」

そう言つて私はカバンを出してあるはずもない教科書類を片付け始めた。

B-1

「優菜ー、今日本屋いかなーい？」

そう声をかけたのは友人の蓮野陽香であつた。

「え？ 今日なんかあつたっけ？」

「ポイント5倍デーだから今のうち安いの買っちゃおつと思つて」

「でもテストもうすぐだよー」

「大丈夫よ、もんだいないっ！」

「いや、そんなドヤ顔でグーされても……」

「とりあえずいこーよ！ ささっ！」

「わわっ！ ……待つてよう！」

そういうことで優菜は半ば引きずられる形で学校を後にした。

優菜とやしーろは渡り廊下を歩いてきた。向かうは文化部が犇めき入ろう部室棟である。この学校は部室棟といった感じで本校学校部分から別れている。文武両道、ということかは別として。この学校は本当に文化部、運動部ともに活発である。

「まずは文芸部から見ているようよ」

「そうだね」

二人はそう言いながら、渡り廊下の窓から外を見た。外はしとしとと雨が降っていた。雨は嫌いだ、と優菜は思った。

「どうして？」

やしーろはそうつぶやいた優菜に尋ねた。

「あれ。私いつのまに言ってた？」

「言ってたよ。結構大きな声でね」

そっか、と普通に何も考えずに優菜は答える。

「昔から思い出しには雨がついてきちゃってさ。なんかの歌じゃないけど」

「そうなのか」

やしーろの言葉に優菜は頷く。なんだかんだで優菜はやしーろと話すことで快樂を得ていたのかもしれない。

文芸部はお休みだった。正確には『部誌制作につき立ち入り禁止!』と大きな藁半紙にマジックでそう書かれたのが貼られていたのであったのだが。

「困ったね……。ぼくもそろそろ帰んなきゃいけないのに」

「じゃあまた明日やっつてあげるよ!」

「いいのかい?」

「大丈夫! 私に任せて!」

そう言つて優菜はエッヘンと胸に手を当てる。

「とりあえず……電車乗るから僕はここで」

そう言つてやしーろはカバンを持つて裏門から出る。

この学校は第三セクターのローカル線となっている海へと伸びる電車が走っている、それで通学している生徒が多いため、その電車もその時間に合わせて電車の数を増やしたりしているのだ。

「じゃーねー!」

そう言つて優菜は精一杯手を振った。

明日また、会えることを祈つて。

優菜と陽香は近くの本屋へとやってきた。そこは首都圏に幅広く分布されている大型の書店で、本だけでなくDVDやCD、ゲームなども販売されているため中学生や高校生などが学校帰りに出向くことが多い。

「きょうはなんの本を買おっかなー」

「どうせライトノベルでしょ？ 陽香は」

「さっすがー。わかってるね！」

「そりやずうつと行ってればね」

優菜はため息を付きながら、そこへ入っていった。

ぐぐり。

そのとき優菜の体を感じる『すべて』が歪んで感じられた。

「……なに？」

「どうしたの？ 優菜」

「ん、いや。なんでもないの！」

「そう」

陽香は翻して、

「それじゃさきいいってるからね！」

「うん」

優菜はそれしか言えず、しばらく立ち止まっていた。

「何をしているの？」

優菜の背中に声がかかる。

そこに居たのはブロンドの髪の毛の少女だった。

「……あなたは？」

少女は、息を呑んだ。

そして、

「私は……比嘉倉夏未」

彼女は、笑って言った。

A-3

結論から言えば、次の日矢代健吾は来なかった。

「どうしてだろう……」

優菜はそんなことを考えつつ、文庫本を開いた。この前本屋に行ったとき買ったもので、もう数回もループしている。けれどお気に入りなので何回も読んでしまうものなの

だ。

「そういえば、今日は矢代健吾はいないのね」

そんなことをしていると篝が優菜のところへやってきた。

「うん、そうみたいだね。今日はどうしたんだらうね？」

「インキュベーターなんだから体調不良とかはありえないはず。そのくせに……何しているのかしら」

「心配してるの？」

「……別に。裏でこそそしてもらうのが困るだけ」

「そりゃ篝ちゃんにとってはそうかもしれないけど……」

「それにワルプルギスの夜は近づいているし。インキュベーターが何を為出かすか、私にもわからない。だから、イライラしているのよ」

「そうだね」

優菜はそんなことを呟いて、また本を読み始めた。

放課後、優菜は鈴菜たちと一緒に近所の喫茶店へ行くこととなった。いつもの黒板厨仲間であるが、そこにやはりやしーろ——矢代健吾の姿はなかった。

「やしろ、どうしたんでしょ……」と言うのは鈴菜。

「——あいつ、風邪ひいたんじゃないの？」とケーキを一口食べながら、杏。

「考えられるけど、あいつが風邪ひくもんかねえ？」とダージリンティーを飲みつつ、
陽香。

「ひとまず」

人差し指を立てて、言ったのは鈴菜だった。

「今日もパトロール、頑張りましょうか」

「そうだね」

「そうだな」

「そうね」

「そうよね」

四人の反応はそれぞれ同じだった。なので、鈴菜から順に立ち上がり、喫茶店の外へ
出た。

「いらっしやーい」

そのとき、喫茶店のマスターの囁れた声とともにドアの鈴が鳴った。そして、ひとり
の人間が入ってきた。いや、それはヒトと呼べるのか？ なんとというかオーラというか
……どこかが違う。それを一番に感じ取ったのは篝だった。

「ねえ」

篝は小さく、呟く。

「どうしたの？ 篝ちゃん」

答えたのは、優菜だった。

「あの、人間。少しおかしいと思わない？」

「——そうかな？ 私は特にそうとは……」

優菜がそんなことを言おうと、したとき。

優菜の体が、薙ぎ倒された。

否、実際にはそう“見えていた”だけだった。

「優菜っ!!」

篝は急いで優菜を助けようと時間停止を試みる。

だが。

「オマエノ ソノチカラハ ワカッテイル……!!」

そのニンゲンらしきものはまるでカセットテープを強引に引き伸ばしたような声をだして、篝に言った。

余兆なんてものは、存在しなかった。

刹那、篝は優菜とは別の方向に薙ぎ倒された。

「私の名前は比嘉倉夏未っていうんだ」

優菜にその少女は呟く。だが、優菜はそんな人間など知らなかった。

「優菜ー、どうしたのー……。ってあれ？ 知り合い？」

それは同行者の陽香にすら知らない存在で。

「知らなくて当然だわ。だって私はこの次元には生まれてすらいない存在だもの」

「——なあ、優菜。この子デンパじゃないのか？」

「え？ デンパ？」

「そうだよ。宇宙人からの電波を受け取って云々ってあれ。あれじゃないのか？」

「ひそひそ声で喋ってるつもりでしょうが、生憎聞こえてますよ」

夏未は溜息をつきながら。

「ともかく……私は、この次元にいる人物を助けに来たの」

「——誰を？」

優菜はおそろおそろ尋ねる。夏未は頷いて。

「はい、インキュベーターの矢代健吾さんです」

その言葉を聞いて、優菜たちは言葉も出なかった。

萌黄色の空を見る

プロローグ

死のうと思ったことはないだろうか。

すくなくとも、私には一度はある。

それは、今だ。

吹き付ける風が私の頬に当たる。この寒さも、最早死んでいく私には心地よくも思えた。

「もう、全てを諦めてしまおう」

そう呟いて、私は金網に手をかける。

ここは、学校の屋上だ。五階である。まずここから落ちればひとたまりもないだろう。私をここまで追い詰めた人間に、最後に驚かせてやるのだ。

「……あれ。どうしてこんなところに居るんだろう？」

不意に、声をかけられ、私は振り返った。

そこには、ひとりの少女が座っていた。頭には白のリストバンドをつけ、肩には文鳥が載っている。さらには彼女が背負っているリュックからはマジックハンドがはみ出ており、しかし彼女はそれを気にせず弁当を頬張っていた。

「何しているの……?」

さすがに、驚いた。

屋上に人がいるだなんて、思いもしなかったからだ。

だって、この時間は放課後でも昼休みでもない。午前六時、まだ誰もいない時間なのだ。どうしてこの時間に入れるのかと謂えば疑問になるけれど、まあ、その辺は曖昧にしてしまおう。私だけのルートつてもものがあるのだ。

けれど、どうして居るのだろう。しかも、食べている感じからすれば私より前にここに居たことになる。どうして?

「……どうしてここに居るのかなって思っちゃった?」

「!」

どうして、知っているのだ。

いや、どうして私の思っていることが解ったのだ。

私は考えても、考えても、考えても考えられなかった。

「私、心が読めちゃうんだ。だから、あなたの思っていることも丸分かりだよ?」
なんとということだ、そいつは困る。

つまりは私が今からする行為にも、理解しているってことだ。

「うん、これから死ぬんでしょ。頑張ってるね」
止めないのか。

「だって、ここまで来たんでしよう。ちゃんと。計画も立てて。だったら止めても意味はないじゃない。さあ、どうぞ。ああ、けれど、私に害のないように死んでもらいたいというか、私も暇じゃないというか」

「だったらさっさとそれを果たしに行けばいいじゃない」

「面倒くさいというか、一人じゃ無理なんだよなあ。ああ、もうひとりくらいいいればなあ。せめて同年代の女子がいればなあ」

明らかに私を狙っている。

……なんだか、冷めてしまった。

そう思うと、私は金網を登り、彼女のいる方へ戻ってきた。

「あれ。踏みとどまった？」

「やる気が出なくなっちゃったよ。また機会のあるときに」

「それが何時だろうなあ」

彼女はずっとニヤニヤしている。正直気持ち悪い。

「やだなあ。気持ち悪くも、思わないですよ。ほら、それに『彼女』じゃ呼びづらいでしょ？ だから、私は梓生（あずき）って呼んでくれればいいからさ。ね、とりあえず君も名前を言っちゃよ」

「どうしてよ」

「うーん……仲良くなるため？」

「今から死ぬ人と？」

「今からは死なないでしょ？」

それもそうだ。

だけれど、機会があれば死ぬ。私は必ずや死んでやる。

「そう言っている人こそ、あまり死なないんだよ」

そうかな。

とりあえず、楽しいことは見つかった。

「協力してくれる？」

「なんだか知らないけれど。協力くらいしてあげるよ。だけど、終わったらその時は」

「わかった。遠慮なく死んでいいよ」

それなら、いいさ。

「さあ。握手しようぜ、トモダチ」

「私のことは亜美（あみ）って呼んでよ」

「わかった、亜美」

そう言つて、梓生は手を差し出した。握手、つてことかな。

「そうだよ、握手しようや」

そして、私もそれに従った。

サマータイムレコード【二次創作】

次号に延期します。申し訳ありません。

次号予告

「RISING mini」第五号

7月20日刊行予定！

【連載陣】

ロジカリスト(白) ネクストワールド 名のなき世界3 俺の同級生が魔王 ここから、脱出してください。 エーテル・ラビリンズ編 ポケモン+ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編 黒板厨ゆうな☆マギカ 文化部争奪戦！ 一触即発☆禅ガール【二次創作】 探偵アプリコット 花と恋の夢(予定) の豪華？ラインナップでお届けします。しばらくお待ちください！

あとがき

第四号、無事刊行しました!! なんとか、という感じですが。意外と毎週はきついですね……。次も頑張ります。なるべく早く出します……。

それでは。

奥付

初版 2013年7月13日